

# 丹敷戸畔の謎解明プロジェクト

度会郡大紀町錦地区は太平洋熊野灘に面した漁業の盛んな町です。「日本書紀」には丹敷(錦)浦に丹敷戸畔という女首長が居たことが記され、鏡や勾玉なども出土しました。「戸畔の会」は「丹敷戸畔の謎解明プロジェクト」を立ち上げ2020年の「日本書紀」編纂1300年を目標に、錦から奈良の都へと繋がる「魚の道」を辿る取り組みをしています。



代表の西村 元美さん

## お問い合わせ

「戸畔の会」  
 度会郡大紀町錦105-3  
 TEL 090-6085-6744  
 (西村 元美さん)  
 e-mail  
 bccan798@ybb.ne.jp

三重県内で活躍するグループを紹介する「いま、グループネット」。今回は、大紀町錦地区で地域の子どもたちを中心に歴史や文化を広く伝える活動をしている「戸畔の会」代表であり、また一緒にプロジェクトを立ち上げ、地域の祭や行事の継承・保護に取り組みグループ「ISOMON」のお母さんたちとともに活躍中の西村 元美さんにお話を伺いました。

——丹敷戸畔の謎とは興味深いですね。どんなお話なのでしょう？

西村：日本最古の歴史書である『日本書紀』には丹敷(錦)に女首長の丹敷戸畔が居たことが記されていて、東征のため

この地に上陸した神武天皇に討たれたという言い伝えがあります。その証拠として考えられるのが2、3世紀頃の土器が錦から発見されたことです。また加工した魚が錦から大和に運ばれたことを記す木簡が平城京跡から出土しているんですよ。そして江戸時代や近代まで大和からは葉や文化、錦からは魚や塩が運ばれ、大和との繋がりは続いていきました。面白いですね。

——では「丹敷戸畔の謎解明プロジェクト」の活動について教えてください。

西村：錦の地域の活性化に取り組んでいる「戸畔の会」と「ISOMON」を含む3つのグループが協力し合って、平成24(2012)年に「丹敷戸畔の謎解

明プロジェクト」を立ち上げました。24、25年度は錦の歴史や言い伝え、祭、方言などについて聞き取り調査をし、その結果をもとにたくさんの方の「一枚紙芝居」を作って披露しました。その他、皇學館大学の岡田登教授(当時)をお迎えして講演会や街歩きも催しました。

——そしてそれが「魚の道」を辿る取り組みへと繋がっていったんですね。西村：そうですね。この活動を始めたことによって奈良の都との繋がりが、その経路に当たる地域との交流や結びつきを再発見するなど、新たな気づきや驚きがあって、その活動に対する意欲と意識が一層高まりました。そんなわけで、2020年の『日本書紀』編纂

1300年を目標に、錦から奈良の都へと繋がる「魚の道」を辿る取り組み、「都に続く縁の道を歩く」さあ！まいこましてこかあ〜と題して平成25(2013)年から毎年行ってきました。

まいこましてこかあ〜というのはいまこましてこかあ〜というのはいまこましてこかあ〜と題して平成25(2013)年から毎年行ってきました。

——現在はどうですか？

西村：今はその集大成として大紀町錦から奈良県の橿原神宮までを踏破する

催し「纏めwalk」が今年5月から始まりました。「神武天皇東征の道編」は、橿原神宮御鎮座130年となる2020年4月初旬をゴールとし、2019年5月頃から7日間に分けて踏破します。「魚の道編」は「神武天皇東征の道編」と同日のゴールをめざして、3月末頃から3泊4日程度で歩き通します。参加者は中高年層が中心で、主に県内の松阪、伊勢、多気周辺の方が多くいますが、遠く大阪や愛知からも参加される方もあり、嬉しい限りです。

——歴史ロマン感じる素晴らしいイベントですね。最後に錦の人や子どもたちに向けて、西村さんの思いを教えてください。西村：錦は何も無いところではない。こんなにも歴史の味わい深い素晴らしいものがあるのだから、自分の生まれた土地に自信と誇りを持つてほしいということです。特に子どもたちには、遠くに出て行ったとしても、この地には帰って来たいと思えるような宝があるんだと伝えたいですね。 インタビュー：末永薫



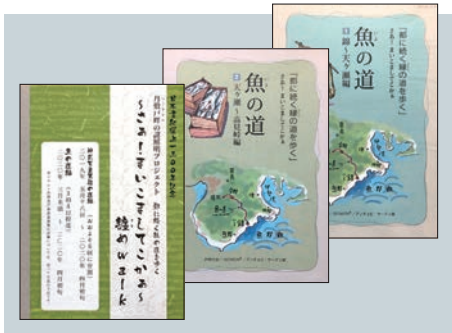
三角縁神獣鏡(さんかくぶちしんじゅうきょう)(手前)と海獣葡萄鏡(かいじゅうぶどうきょう)



“一枚紙芝居”を地元で披露※  
一枚紙芝居「丹敷戸畔」※



大和をめざして「魚の道」を辿る※



「魚の道」と「纏めwalk」の地図とパンフレット

※印の写真は取材先から提供していただきました